

RECNAと核兵器廃絶長崎連絡協議会の10年

調 漸

核兵器廃絶研究センター(RECNA)を2012年に立ち上げ、半年後にナガサキユース代表団が始動し、さらにこれらを支え、市民社会とのパイプ役を担う目的で長崎県・長崎市とともに長崎大学の三者による核兵器廃絶長崎連絡協議会を組織して10年の時が過ぎた。まさに被爆地に在って長崎の想いを背負う、市民のシンクタンクであり続けた10年であったと思う。全国から集結した研究者たちは毎年春頃から原爆忌を迎える8月までの間、毎日のように被爆者と市民の想いと行動が報じられる長崎に住んで核廃絶への期待を感じながらの日々であるに違いない。こうした中でユース代表団をはじめとする学生たちを育て、国際社会と国内外の研究者たちとの連携を育んだ10年でもあった。

一方では核不拡散条約(NPT)再検討会議はコロナパンデミックによる延期の時期を挟んで遅々として進まない時間が続き、2回続けて最終文書採択に至らないほどの難局を迎えて核保有国と核の傘国の参加する会議故の不調が続いている。この膠着状態に痺れを切らした核兵器に依存しない生き方を選択する国々と市民社会が牽引する核兵器禁止条約が提起され発効した。この流れの中でRECNAは北東アジア非核化を目指すプロセス(ナガサキ・プロセス)や、核抑止に依存しない安全保障の枠組み構築等を提案し、さらに国際的なオピニオンを牽引するとともに、国際的な核廃絶・核抑止の議論の場を提供するための英文ジャーナル誌 J-PANDは創刊以来着実な発展を遂げている。

核軍縮をめぐる混迷を深める世界情勢の中でこの10年の



歩みの先に何を指すか、我々の真価が問われると思う。核兵器は使ってはならない、使えば再び多くの爆死者と被爆者を産み、後遺症、次々に襲いかかるガンや遺伝子異常の影響に怯えて暮らすことを強いるという長崎の真実を伝え続けること、全てはここから始まるのだと思う。

(しらべ すすむ、核兵器廃絶長崎連絡協議会会長)

RECNA/PCU-NC 設立10周年記念事業

鈴木 達治郎

2022年度は、RECNA並びに核兵器廃絶長崎連絡協議会(PCU-NC)の設立10周年に当たるため、昨年度より準備を始め、下記のような事業を無事終了することができた。

1. 10周年記念特別講演会(RECNA, PCU-NC共催)(2回開催)

第1回は駐日ジャマイカ大使ショーナーケイ・リチャーズ大使を10月28日(金)～30日(日)にかけて長崎に招待し、28日(金)には長崎県知事、長崎市長、長崎大学学長を表敬訪

問。29日(土)に原爆資料館、追悼祈念館を訪問。爆心地にて献花をされた。そして、29日(土)に特別講演会(場所:原爆資料館、13:30～16:00)「核なき世界への新たな挑戦—長崎からの発信—」を開催した。大使の基調講演「長崎の新たな市民外交に向けて」に続いて、中村桂子准教授との対話、朝長万左男氏、宮崎園子氏、中村楓氏をパネリストに迎えてのパネル討論を行った。30日(日)の午前中には、ユース代表団、明治学院大学学生等約20名の若者と対話を行った。



ショナーケイ・リチャーズ駐日ジャマイカ大使
2022年10月29日 長崎原爆資料館ホール
撮影:RECNA

第2回は2023年1月21日(土)、芥川賞作家の平野啓一郎氏を長崎に招いての特別講演会(場所:出島メッセ、3:30~15:30、出島メッセ・PCU-NCと共催)「核なき世界の想像/創造」を開催した。現地で好文堂書店の書籍販売・サイン会も同時に開催された。講演が約1時間、休憩をはさんで45分の質疑応答で参加された市民の方々の質問に平野氏から丁寧な応答があり、充実した講演会となった。参加者は会場が約330名、オンラインが約180名の合計約510名に達した(過去最大の参加者)。

2. 核兵器廃絶市民講座(RECNA, PCU-NC共催)(特別講座を2回開催)

2022年度に開催した5回の市民講座のうちの2回を10周年記念特別講座と位置付けた。第2回(7月2日)は「RECNA10年を振り返る」と題し、片峰茂顧問、調漸核兵器廃絶長崎連絡協議会会長、梅林宏道客員教授、田上富久長崎市長の4名がRECNA創設に託した思いや、準備当時のエピソードなど貴重な話を紹介した。第3回(9月17日)は「RECNAの今後を考える」と題し、青来有一客員教授、川良真理氏(長崎文献

社副編集長)、遠藤誠治氏(成蹊大学教授)が登壇した。この市民講座の前段として、青来客員教授、川良氏、遠藤氏、林田光弘特任研究員、宮崎園子氏をメンバーとする「RECNAの将来を考える会」(座長:青来客員教授)を7月2日、9月8日の2回にわたって開催し、RECNAの活動に関する期待などについて意見交換を重ねていた。

3. 第1回「核なき未来 オピニオン」賞

若い世代への意識喚起を目的として、「核兵器と私たちの未来」(2022年度のサブテーマは「ウクライナ危機が問いかけるもの」)に関するオピニオンを募集した。長崎新聞社の協力を得た。審査委員会委員長として青来有一客員教授、副委員長として石田謙二客員教授、また、様々な分野で活動する若手(小島萌衣氏、島山澄子氏、松永瑠衣子氏)に審査委員として尽力いただいた。応募総数は54名(日本語40件、英語14件)で、海外8か国(英国、イラン、パキスタン、インド、オーストリア、オーストラリア、韓国、ナイジェリア)からも応募があった。最優秀賞1名(西山心、ミドルベリー国際大学院モンレー校修士課程)、優秀賞2名(Alock Chandan, デリー大学(イン

芥川賞作家 平野啓一郎氏 2023年
1月21日 出島メッセ長崎コンベン
ションホール 撮影:RECNA



ド)東アジア研究学科博士課程、青木啓輔、会社員)を選考し、9月24日に長崎大学で授賞式及び記者会見を行った。最優秀作品は長崎新聞紙上(9月25日)にも全文が掲載された。

4. 核兵器廃絶長崎連絡協議会10周年事業

(1) 平和活動ポータルサイトの開設

核兵器廃絶長崎連絡協議会の10周年記念事業の一環として、平和活動に関する情報を集積したポータルサイト(「いっぽめStation～みんなのぴーすと出会える場～」)の年度末公開を予定し、ナガサキ・ユース代表団のOB・OGらの協力も得

ながら準備を進めている。このポータルサイトの開設に合わせ、平和や核軍縮に関連するキャリアを紹介する「ピースキャリアアーク」も西田充長崎大学教授と酒井環氏(長崎ユース代表団6期生、現在長崎新聞記者)を招いて3月31日に開催した。

(2) ナガサキ・ユース代表団10年誌(CAPSULE No.2)

ナガサキ・ユース代表団が5周年の際に発行したCAPSULEの第2号として、ナガサキ・ユース代表団の10年を振り返り、OB/OGやゆかりの方々からの思いを集めた冊子を発行した。

(すずき たつじろう、RECNA副センター長・教授)

「北東アジアにおける核使用リスクの削減」(NU-NEA)プロジェクト

西田 充

RECNAは、昨年度より、ノーチラス研究所及び核軍縮・不拡散のためのアジア太平洋リーダーシップ・ネットワーク(APLN)と「北東アジアにおける核使用リスクの削減:二度と核兵器が使われないために」(NU-NEA)と題する3年間の共同研究プロジェクトを開始した。

1年目の昨年度は、北東アジアにおいて、意図的、偶発的を含めどのような条件下で核兵器は使われ得るのか、核兵器が使用された場合のその後の過程はどのようなものがあり得るかといった問いに答えるべく、安全保障、核戦略、朝鮮半島、国際政治などの専門家による知見をもとに、25の核兵器使用のケースを含む報告書を公表した。

2年目の今年度は、これら25のケースのうち5つのケースのシミュレーション分析を通じて、直接の死傷者数と、遅れて影響してくる放射線影響による癌による死亡者数の数量化を試みた。5つのケースは、1つの核兵器の使用で留まったものから、限定的ながらもグローバルな核戦争に発展したもので含まれる。直接の死傷者と癌死亡者の数量化は、①核爆発によって生じる熱流、②火事嵐(熱流によって生じる複数の火事が、熱の急上昇によって生じるハリケーン的な風力によって広大な地域で合流して生じる)、③爆発による超過圧力(建物を破壊)、④急性放射線、⑤放射性降下物、⑥急性放射線と放射性降下物によって生じる癌死亡者(核爆発直後の死亡者を除く)の6つの影響をもとに分析した。

その結果、人口非密集地帯や軍事目標への限定的な核使用ケースであっても数万～数十万人の死亡者、最も大きな核使用ケースでは2百万人以上の直接死亡者、数十万人の癌死亡者が出る事が判明した。ここで注意すべきこと

は、本プロジェクトでの核使用ケースは「可能性が高い(likely)」ものではなく、「十分に考えられる(plausible)」ものを想定していることもあり、今回のシミュレーションにおける最も大きな核使用ケースと言っても、最大24発程度の核戦争による被害の評価であり、さらに核戦争が拡大する可能性もありうる。

今回のシミュレーションでは、高出力の空中爆発の方が相対的に地上爆発よりも致死率が高かった。紛争がエスカレートするにしがた、更に核兵器が使用されれば(特に高出力の空中爆発)、火事嵐を引き起こすこととなり、瞬時に犠牲になる被害者の数が拡大する。歴史的に、軍事計画立案者は、こうした火事嵐の影響を十分に考慮に入れていないため、核使用を検討するうえで被害を過小評価してきたと指摘されている。

更に、高線量放射線による健康上の急性影響と長期性癌による死亡を考慮に入れると、少数であっても地上爆発や、比較的低出力の核兵器であっても、不釣り合いなほどに高い致死数を引き起こすことになる。

このように、比較的限定的な核使用であっても、甚大な人道上的影響をもたらすことが、改めて明らかになった。加えて、インフラの破壊を含めた経済・社会面の影響や、気候変動や海洋への影響を含め、グローバル・地域・ローカルの環境上の影響も含めれば、甚大な影響をもたらすこととなる。3年目には、これらの成果をもとに、核使用リスクを最小化するための政策提言を提示する予定である。

(にしだ みちる、多文化社会学部教授)

ナガサキ・ユース代表団 11期生 活動開始

2022年12月7日水曜日、ナガサキ・ユース代表団の11期生の任命式が実施され、長崎大学および活水女子大学の学生7名が新たにナガサキ・ユース代表団としての活動を開始した。今年、8月にオーストリアのウィーンで開催される、2026年核不拡散条約(NPT)再検討会議へ向けての第一回準備委員会に派遣される予定であり、その前後、長崎から核兵器廃絶へ向けての発信を行うために必要な活動も併せて行うことになっている。

ナガサキ・ユース代表団の11期生は下記の通り(50音順、学年は2023年3月1日現在)

長崎大学薬学部1年 有吉葉奈子

長崎県出身、長崎大学薬学部の有吉葉奈子と申します。私は長崎と他県の学生間での平和への意識の差に驚いたことをきっかけに、平和活動を始めました。大学生となった今、世界に目を向け、核問題についてより深く理解し、自らも自分の平和への思いを発信していきたいです。また、この活動を拠点に長崎を超えた若者間での大きなネットワークを築き、長崎だけでなく、日本そして世界へと活動の輪を広げていきたいと考えています。

長崎大学環境科学部1年 今岡明日美

私は、高校時代、世界中で内戦や侵攻、クーデターなどの人道危機が起こっており、世界が平和ではないことを知りました。私の目標は、これらの問題や核兵器の問題を、「歴史」ではなく「今起きている問題」として学ぶこと、また、それらが人間以外の生物や様々な環境、マイノリティと呼ばれる人々へ及ぼす影響等も多角的に学ぶことです。多くの人とその学びを共有し、真に平和な世界を創る一員となることを、ここに誓います。

長崎大学多文化社会学部2年 梶立人

長崎大学多文化社会学部2年の梶立人です。大阪府出身で大学進学を機に長崎県に移りました。「奇跡は起こるものじゃない！起こすものだ！」というフレーズが私は好きです。何もせずに奇跡は起きないです。常にアクションを行うことによって結果が生まれます。世界中の人々が些細なことでも前に進み続けた結果、不可能と言われた核兵器禁止条約が発効されました。核兵器保有国が批准していないために無意味と主張する人もいますが、少なくともこの条約が発効されたことにより核兵器使用のハードルが格段に上がったと言えます。小さな一歩、小さなアクションですが、私はこれからナガサキ・ユース代表団の活動を通して核兵器廃絶を実現したいと考えています。

長崎大学多文化社会学部1年 末廣万葉

長崎大学多文化社会学部1年の末廣万葉です。私は、広島で生まれ育ち、大学進学を機に長崎に来ました。ナガサキ・ユースとして、フィールドワークや勉強会などを通して核に関する問題を様々な角度から学び、NPT再検討会議に臨みたいです。活動を通して学んだことや伝えるべきだと感じたことなどを出前講座やSNSなどで積極的に発信し、核問題を考えるきっかけを作りたいです。

長崎大学教育学部4年 平林千奈満

長崎大学教育学部4年の平林千奈満と申します。長崎県出身で、平和教育を受けて育ってきました。大学生活を通じて、当たり前だと思っていた平和教育は当たり前ではなく、国内においても長崎と広島に投下された原爆に関する知識に大きな差があることが分かりました。ナガサキ・ユース代表団の一員として、一人でも多くの方に核兵器廃絶の大切さを自分事として考えていただけるように、活動していきます。よろしくご願ひ致します。

活水女子大学国際文化学部2年 安元和愛

活水女子大学2年の安元和愛です。私は祖父父母が被爆者の被爆3世で、高校時代には平和学習部の一員として活動していました。しかし平和活動や核問題に興味はあるものの、自分から発信することがなかなか出来ず、受け身の状態でいました。ユースの一員となったからには、責任を持ち、同じ志を持ちながらも多様な考えを持った仲間と協働し、自ら発信することを大切にしながら、核なき世界への第一歩を踏み出したいと思えます。

長崎大学多文化社会学部1年 山元さくら

ナガサキ・ユース代表団11期生の山元さくらと申します。私は、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻をきっかけに、核問題を始めた戦争問題に向き合うことの重要性を痛感し、本団体への入団を決意しました。今まで核や戦争に無関心であったからこそ、人一倍努力して知識を深めると共に、多角的な視点から核問題に向き合いながら、「若者」として何が出来るのかを考え、1年間活動してまいります。どうぞ宜しくお願い致します。



ナガサキ・ユース代表団11期生メンバー

向かって左から 末廣、梶、有吉、安元、今岡、山元、平林 撮影:核兵器廃絶長崎連絡協議会

RECNAの活動

2022年10月1日～2023年3月31日

- | | | | |
|-----------|---|----------|--|
| 10月4日(火) | ナガサキ・ユース代表団第11期生募集開始に伴う記者会見
調 PCU-NC会長、吉田センター長
場所:RECNA1階会議室 | 2月4日(土) | 2022年度核兵器廃絶市民講座
第5回 私たちの平和活動は持続可能か
講師:鳥巢智行(株) Better代表取締役、シンクタンク 長崎みんな総研(社長)、林田光弘(RECNA特任研究員)、村上文音(長崎大学多文化社会学部学生、ピースキャラバン隊)
場所:長崎原爆資料館ホール + オンライン |
| 10月14日(金) | RECNA/PCU-NC創立10周年記念特別講演会 第1回「核なき世界への新たな挑戦:長崎からの発信」開催に伴う記者会見
調 PCU-NC会長(10周年記念事業実行委員長)、吉田センター長、鈴木副センター長、中村准教授
場所:RECNA1階会議室 | 2月18日(土) | 第38回RECNA研究会
講師:副島英樹(朝日新聞編集委員兼広島総局長)
場所:RECNA1階会議室 + オンライン |
| 10月29日(土) | 【創立10周年記念事業】PCU-NC・RECNA創立10周年記念特別講演会 第1弾「核なき世界への新たな挑戦-長崎からの発信-」
講師:ショナーケイ・リチャーズ(駐日ジャマイカ大使)
場所:長崎原爆資料館ホール + オンライン | 2月24日(金) | レクナの目(見解文)「ウクライナ侵攻から一年を迎えて」発表 |
| 11月26日(土) | 2022年度核兵器廃絶市民講座
第4回 米中関係と核軍縮
講師:植木千可子(早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授)、吉田文彦(RECNAセンター長)
場所:ミライオン図書館(大村市) + オンライン | 2月27日(月) | 第39回RECNA研究会
講師:李起豪(イ・キホ)教授(韓信大学 平和と公共性センター長)
場所:RECNA1階会議室 + オンライン |
| 12月7日(水) | ナガサキ・ユース代表団第11期生 任命式及び記者会見
ナガサキ・ユース代表団第11期生、調 PCU-NC会長、吉田センター長ほか
場所: RECNA1階会議室 | 3月6日(月) | RECNAラウンドテーブル
テーマ:先端技術・気候変動と核リスク
講師:セバスチャン・フィリップ(プリンストン大学)、クリスティン・パルティモア(気候安全保障センター・戦略リスク評議会(米国))
場所:RECNA1階会議室 + オンライン |
| 2023年 | | 3月7日(火) | 「被爆の実相の伝承」のオンライン化・デジタル化事業ホームページ公開に関する記者会見
吉田センター長、中村准教授、林田特任研究員
場所:RECNA1階会議室 + オンライン |
| 1月21日(土) | 【創立10周年記念事業】PCU-NC・RECNA創立10周年記念特別講演会 第2弾
芥川賞作家・平野 啓一郎 講演会「核なき世界の想像/創造」
講師:平野啓一郎(芥川賞作家)
場所:出島メッセ長崎2Fコンベンションホール | 3月24日(金) | NU-NEAプロジェクト記者会見
吉田センター長、鈴木副センター長
場所:RECNA1階会議室 |
| | | 3月29日(水) | RECNAポリシーペーパー記者会見
吉田センター長、鈴木副センター長、中村准教授
場所:RECNA1階会議室 |

3月31日(金) ポータルサイト記者会見
調 査 PCU-NC 会長、吉田センター長、中村准教授
場所: RECNA1階会議室

3月31日(金) 第1回ピースキャリアトーク～平和を「仕事」に！～
講師: 酒井環(長崎新聞社記者)、西田多文化社会学部教授
場所: オンライン(Zoom)

お知らせ

2023年度核兵器廃絶市民講座「核兵器のない世界をめざして」

第1回「G7広島サミットを前に」

講 師: 吉田文彦 (RECNAセンター長)
西田 充 (長崎大学多文化社会学部教授)
金崎由美 (中国新聞ヒロシマ平和メディアセンター長)

日 時: 2023年4月22日(土) 13:30～15:00
(講座終了後「RECNAと語ろう」)

会 場: 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館交流ラウンジ

第2回「平和教育における被爆地の役割—サービス・ラーニングを通じた大学生の学び」

講 師: 西村幹子 (国際基督教大学教授)
ICUの学生
ナガサキ・ユース代表团

日 時: 2023年7月15日(土) 13:30～15:00
(講座終了後「RECNAと語ろう」)

場 所: 長崎原爆資料館ホール

第3回「核兵器禁止条約の現状と課題」

講 師: 中村桂子 (RECNA准教授)
河合公明 (RECNA教授)

日 時: 2023年9月16日(土) 13:30～15:00
(講座終了後「RECNAと語ろう」)

場 所: 長崎原爆資料館ホール

※ すべて入場無料、事前登録不要。

※ オンライン配信も同時に行います。オンライン配信の場合は事前登録が必要です。

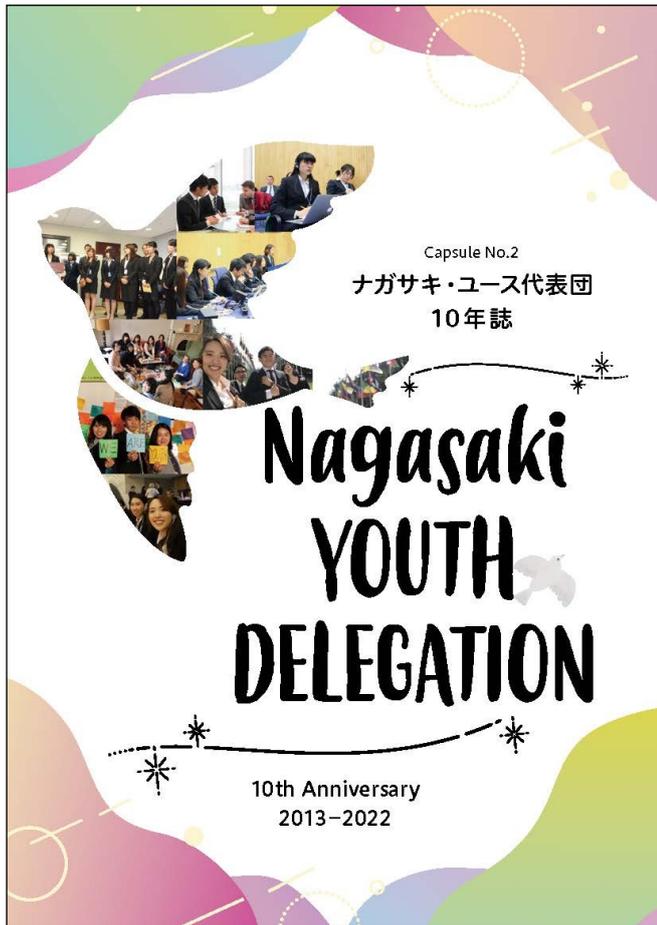


RECNA叢書第8号「核なき世界への選択: 非核兵器地帯の歴史から学ぶ」を刊行。

著 者: エクゼキエル・ラコブスキー

監 訳: 鈴木達治郎、中村桂子、山口 響

Amazonより [Kindle版](#) をご購入ください。(デジタル版のみでの販売です)



「Capsule No.2 ナガサキ・ユース代表団10年誌」が刊行されました。[こちら](#) から閲覧、ダウンロードすることができます。

RECNA ニュースレター
長崎大学核兵器廃絶研究センター

第11巻2号 2023年3月31日発行

発行 長崎大学核兵器廃絶研究センター
〒852-8521 長崎市文教町1-14
Tel. 095-819-2164 Fax. 095-819-2165
E-mail: recna_staff@ml.nagasaki-u.ac.jp
<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/>

©2023 長崎大学核兵器廃絶研究センター